慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	武藤光朗著 経済倫理
Sub Title	
Author	氣賀, 健三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.12 (1956. 12) ,p.902(66)- 906(70)
JaLC DOI	10.14991/001.19561201-0066
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561201-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

武藤光朗著

『經濟倫理』

この本において著者が追求しているものは、著者の言葉によると次のとおりである。「現代の經濟的メカニズムの中で眞實の自己を見失つて機能化されつつある人間がいかにして自由な決意と責任をもつて眞實の自己を取戻すか」（九頁）が現代の經濟倫理探求の根本動機であると。著者によると現代の各個人は群衆と群衆的裝置――大規模な技術とそれにもとづいて組立てられた巨大な社會的メカニズム――の中で自己を見失い、何等かの仕方で群衆に奉仕することを強いられ、群衆的裝置の一機能に轉化してしまつており、個人は代替可能な一分子にほかならない狀態であるから、「本來の意味での彼自身」（五頁）ではなくなつてしまつているというのである。

このような立場から著者は巨大な社會的メカニズムを經濟の面について取上げてみる。著者にとつて最初に眼に映るものは近代資本主義のメカニズムと、この中で自己を見失いつつある個人の精神的狀態である。著者の筆は最初にマックス・ウェーバーによつて指摘されたプロテスタントの資本主義精神である。人間に聖なる職業としての營利の仕事の意義を說き、勤儉・節約の禁欲的精神にその倫理的價値を認めたプロテスタントの考え方は、近代資本主義の發展、合理的な生活形式を形づくる主要な指導精神となつた。しかし資本主義メカニズムの發展は著者によると人間の化石的機械化を生み出したとみられる。化石的機械化の徴候は、著者のウェーバー解釋に

したがうならば、勤勉、創意、克己の德が卽物的・非人間的貨幣價値量におきかえられること、純粹な職業專心の精神は現世的物質生活の充足欲望と化すること、勞働が經濟的壓迫として受取られるような事態を意味する。「近代資本主義による經濟生活の合理化過程は、勞働者の人間性の自然の要求にとつて『非合理的なもの』に轉化することによつて、これに反抗しようとする新しい倫理的決意をよび起し、これを主體的契機として危機的な限界に突き當らざるを得なくなつたのである」と著者はいう。

著者がこの本の全體を通じて提出する問題意識は上述の如きウェーバーのそれに基くものといつてよいであろう。これに對して著者が用意している解答は、第一に資本主義のメカニズムに抵抗しようとするマルクス主義、第二にこのメカニズムの修正的發展を意圖する新自由主義、第三には計畫經濟化の見解である。

第一のマルクス主義の紹介において、著者はプロレタリアの自己分裂を强調する、すなわち人格としての生活と疎外化された勞働への分裂である。この自己分裂を「人格としての自己主張によつて克服すべく決意することによつて、プロレタリアは革命的となるといわれる。ただしここでいう人格としての自己主張とは、個人主義的な意味を含まない。著者のマルクス解釋にあつては、個人は普遍化され、全體化された個人、共同社會のなかに全人格を吸收されてしまう個人であり、自己目的としての個人の人格生活はあり得ないのである。後者の如き人格主義の主張は近代ブルジョア民主主義の產物ではあつても、プロレタリア的自由とは異質的である。マルクスはこれを唯物論辨證法によつて歷史的必然として論證しようとした。そこでは必然卽自由、存在卽當爲である。

著者は科學的方法論の立場から、マルクスの科學的豫言、歷史的必然の絕對化に反對する。科學的認識は無限に多樣なるものの一面的認識であるというウェーバー的主觀主義の立場からみて、人間歷史のうごきを「物質的生活諸條件」によつて決定してしまうとみる見解は、科學の限界を超えた歷史哲學的信念ではあるまいかと著者はいう。そしてこのような哲學的信念に對しては、われわれはそれぞれの良心によつて個人としての人間の自由を求める努力と決意をもつて對抗することができると著者は考えている。次いで著者は、全體主義的自由がいかにソ連において實現されようとしたかを眺める。近代民主主義的自由の經驗の少ないこの國で、この實驗が行われたことは歷史のアイロニイであると著者は表現している。

著者によれば近代的民主主義、自律的自由を尊重する西歐の諸國民は、權力の權威による自由に激しい嫌惡と反撥をひきおこすのが當然である。しからば、さきにウェーバーの言葉で指摘された、資本主義の非合理化、頽廢または「止まることを知らぬ官僚制化」はいかに對處さるべきであろうか。社會主義の思想は官僚制化の前進にほかならないが故に個人の解放にはならない。レーニン主義は徹底的な官僚制化によつて個人を徹底的に官僚的メカニズムの中に吸收しようとするものであつた。ところで著者は、官僚制化の方向をつきつめようとした學者としてシュムペーターを引合に出してくる。というのは彼は官僚制化の終點に待ち構えている社會主義社會において、必ずしもブルジョア的民主主義が見失われないことを主張するからである。それには條件がある、簡單にいえば社會化のための成熟である。しかし成熟の條件が成立する場合でも、人間の主體的態度は一義的ではない。シュムペーターは政治的形式としての民主主義の可能性を說くけれども、それには一定の條件があるばかりでなく、元來官僚制化そのものの前進を豫定しての議論である。したがつて、官僚制化のもとに窒息させられようとしている個人の自由はこの豫言によつて光明を見出だすことができない。

そこで著者は、資本主義のメカニズムを修正維持して、自由を救濟しようとする第二の方向の學者の意見に注意を向ける。ここに登場してくる學者はマーシァル、ピグウ、およびケインズである。マーシァルの經濟騎士道は營利目的を追う經濟行爲の仕方に道德的意義を帶びさせ、高尙にして社會公共に奉仕する精神を經濟の世界に振い立たせようとするものである。著者によれば、マーシァルの精神主義的な希望は、ヴィクトリア朝時代の榮光の餘映であるという。ピグウの厚生經濟學はこの餘映の消えかかつたころの社會狀態で、失業と貧困の問題をとりあげて、傳統的な功利主義の立場からそれを照射しようとするものであつた。しかしこの功利主義は、近代的な個人主義的價値感情――ニヒリスティックと著者は呼んでいる――によつて反撥される。こうして國家官僚制化と個人主義的自由の背反は依然として解決されない。ケインズの經濟思想の特徴の一つは不確實性の概念の導入である。それは彼がニヒリスティックな價値感情を身に備えていた一つの證據であるという。不確實性の要素の重視を手掛りにして著者はケインズ經濟理論を略說し、彼の經濟政策的結論たる國家的投資統制にまで說き及ぶ。しかもこの政策的結論は、著者の意見では官僚制化と調和する限度で個人の自由

を犯すものでなく、むしろそれを擁護しようとするケインズの意圖であると指摘しているが、著者は苦肉の策という形容詞でこれを表現している。

このような段階を經て第三の種類、計畫經濟論が登場する。ここで著者が取上げるものはアメリカのニュー・ディールの實驗やイギリス勞働黨の社會化政策、それに續いてハイエクの計畫即隷從論およびウートンの計畫・自由調和論である。ハイエクの個人主義は計畫と自由の背反を主張するものではあるが、著者によれば、必ずしもニュー・ディール型の統制と矛盾するものではない。しかしイギリス勞働黨の社會化政策とは衝突する、けだしそれは公共的管理の部門が殘りの部門の調子を決定するほど大きくなるからである。ウートンは社會主義メカニズムの中で自由がいかに働くかを檢討する。經濟生活や政治生活の種々の部門において自由が計畫と調和しうるというのがウートンの結論である。

ウェーバーに始まる著者の學者遍歴はウートンにおいて一應終點に達する。一應というのは、著者はウートンの解答を發見して十分に安心しているようにも思えないからである。おそらく他のどの學者の說よりもウートン女史の結論に好意をもつていると思われる。しかし著者の本來の經濟倫理觀は、人間があくまでも「眞實の自己」を求める自由な個人と個人の交り、すなわち實存的な交りをその根底に持つということに存する。ウートンの社會主義設計圖がこの要求に從うものであるかどうかは、おそらく人間の主體的態度の問題なのであろう。著者はその可能性を說いて自から安心するまでに至つてはいない。したがつてこの本の讀者をも安心させるまでに至らないのである。著者のウェーバー的な謙虛な態度は著者がヤスパースより受けた實存主義をすらきわめて謙虛な形で示しているに止まるのである。

著者の立場として最初に提出される眞實の自己、自由な決意と責任をもつ眞實の自己を主張する立場とは何を意味するのであろうか。この自己は群衆や群衆的裝置に對立するものであり、資本主義のメカニズムの中では自己疎外の情況におかれるもののように解釋されている。しかし、いつの時代にかこのような情況におかれなかつた個人があり得たのであろうか。個人生活だけの個人の如きものは現實的にも論理的にも考え難い。人間は本來社會的人間であり、社會のそとに人間はない。自己をとりまく人間は、群衆であると著者はいうけれども、この群衆とはほかならぬ自己の同胞であり、自己の半身であると考えることはできないであろうか。共同社會、國家的共同體の觀念を個人のうちに見出だすことが、個人を群衆的裝置の對照の間において考えることが必要ではないであろうか。わたくしは、著者の抽象的な個人觀に不同意である。一個人の自由な決意と人間全體の歷史の動きとを對立させる論理によれば、個人はつねに疎外化され、即物化された姿で映るにちがいない。私見によれば群衆から切りはなして完全に自由だと考えうる如き自由はありようがなく、人はすべて社會的人間として社會の動きに拘束されているのである。人間が自由を失つたり、機械化、化石化されるというのは、この社會的拘束の型にあるのであつて、拘束そのものにあるのではない。ウェーバーのいう官僚制化もこの意味で受取るべきものと思われる。このようにみれば、歷史における自己疎外といわれる關係は、自由との對立においてとらえらるべきものではなく、拘束の型における矛盾として理解さるべきものではないであろうか。

ウェーバーのいう人間の機械化、化石化の方向は、マルクスによりプロレタリアの自己分裂という形でとらえられたとみている。これに對する著者の批判はこの解釋そのものに對する批判ではなくして、それに對する方法論的な批判にとどまつている。讀者としてはむしろこの解釋そのものの當否をききたいと思う。著者はマルクス主義が資本主義的自己疎外の起るべき西歐諸國で實行に移されないで、資本主義のメカニズムの發達の最もおくれたロシアで支配力を得たことを歷史のアイロニイと表現しているが、この言葉は適切ではないのではないか。この事實は、ロシアの出來事がマルクスの豫言とは全く異なる出來事であるか、或いはマルクス主義が全く誤つたドグマにすぎないかを表わしているのではないであろうか。いずれにしても、その出來事は經濟的メカニズムの自己疎外に對する抵抗だということにはならないであろう。けだしロシアにはそのような自己疎外は見られなかつたからである。著者はレーニンの仕事をもつて「止まることを知らない官僚化の前進」に即應する人間改造といつている。しかし、ソ連に存する官僚化の傾向は、西歐的合理主義の洗禮を經たものとはいいがたく、ウェーバー的官僚化とはその起源を異にするものではないであろうか。

西歐的社會ではブルジョア的民主主義の力は强い。そこでは官僚化の前進に對する抵抗がみられる。「この運命的な流れに對して障壁をきずき、その流れを誘導して、自己目的としての個人の自由の息づく空間を圍うよう努力すること」が現代の自由社會の倫理的努力であるという。マーシャルもピグウもケインズもすべてこの角度から觀察されている。これらの學者はたしかに傳統的な個人的自由主義を守ろうとしている。從つて政府官僚が個人的經濟活動に取代わることを好まない。然しはたしてイギリスの經濟がやむことを知らぬ官僚制の前進に惱まされていると考えていたであろうか。事實としてイギリスの經濟はそういう傾向を示したであろうか。さらにまた政府官僚の經濟的進出はとりもなおさず人間機械化に等しいものであろうか。これらは必ずしも等しいものではないのではないか。もしそう考えることができるならば、マーシャルの騎士道精神の提唱は、個人的自由主義の倫理的昂揚にちがいないし、その墮落に對する警告であるとしても、自動的官僚制化の運命的な流れに對する抵抗というほどのものであろうか。ピグウの厚生經濟學は傳統を背負つた一つの改良主義ではあつても、歷史の流れに對する抵抗の倫理ではないと思われる。その關係はケインズにあつても同樣であろう。

進むところを知らぬ官僚制化の運命的な流れは、むしろ官僚制化を積極的に迎えいれようとする現代の社會主義經濟化と計畫經濟化にみられる。しかし社會主義化や計畫經濟化がそのまま官僚制化、人間の機械化を意味するとは限らない。兩者を同一視するハイエクの斷定は早計にすぎるであろう。著者はハイエクを、ニヒリスティックな個人的諸價値の主張者と呼んでいる。しかしニヒリスティックでなくとも、個人的自由主義者は、計畫化を自由と兩立し難いものとみるであろう。彼等の自由は社會的拘束の最少を條件とするものだからである。しかし個人を社會的存在と解し、個人の自由と社會的自由の中で解釋するものにとつては、拘束すなわち不自由では

ないのと同様に、計畫すなわち譏從を意味しない。自由は自由の秩序を持つ。秩序は個人を拘束するものである。もし個人が著者のいう如き實存的な個人、自由な決意と責任をもち、自己目的を追求する個人であるならば、彼は永遠に卽物化の矛盾に惱むのではなかろうか。（A5判、一六九頁、春秋社、昭和三十年、二五〇圓）

（氣賀　健三）

ヤコフツェフスキー著
石川郁男譯

『封建農奴制ロシヤにおける商人資本』

著者ヤコフツェフスキーはソ同盟科學院經濟研究所員、現在アカデミー經濟學會會員候補で、いくつかの共同研究、討論會において活躍しており、たとえば、一九五三年一〇月の「封建時代のロシアにおける商品生産の發展」にかんする討論、ソ同盟科學院歴史研究所ソ同盟封建制時代史部の發案になる「ロシアにおける『原始的蓄積』にかんする理論協議會」などにおいて積極的な發言をしている新進の經濟史家である。本書は彼がアカデミー經濟學會に提出した學位論文で、一九五三年に出版されたものであるが、その出版の直後（一九五三年一二月）、『歴史學の諸問題』誌編集部によつて合評會がもたれ、ベ・ベ・カーフェンガウス、エヌ・エム・ドゥルジーニン、エス、ゲ・ストゥルーミリンなどの著名な歴史學者が參加し、活潑な討論が行われたことからみて、ソ同盟においてかなり注目すべき勞作であつたことが推察される（cm.《Вопросы Истории》, 1954, Но. 1.）。

本書における著者の目的は「具體的な史料にもとづいて、封建的＝農奴制的ロシアにおける商品生産および流通の發展と役割とを、明らかにすること」（六頁）であり、從つて、この研究は「商業資本の發展における第一の歴史的時期」（一〇頁）、すなわち、産業資本に從屬して「生産的資本の代理者としてのみ機能」する産業資本主義時代の商業資本ではなく、それ以前の、いわゆる「前期的資本」としての商人資本にかぎられる。

著者は、この前期的商人資本の歴史を二つの基本的な段階にわけ、第一段階を「資本の運用と發展との主な部面が外國貿易であつた時期とし、第一章「一七世紀中頃までのロシア外國貿易における商人資本の發展」としてまとめ、第二段階を「一七世紀中頃から、國内市場への商人の力強い定着がはじまり、商人資本〔が〕自國の生産者間の取引の仲介者となつた」（四四頁）時期として、第二章「一八世紀のロシア國内市場における商人資本の發展」において考察している。ヤコフツェフスキーによれば、この第二段階になると、國内市場において、かつてはおおむね價値どおりにおこなわれていた商業が「不等價的なものとなる」（一二頁）。そこで、「かつて商人が、地主から商品を安い價格で買うことによつて、すなわち、すでにりやく奪されたものの再分配によつてもうけていたとすれば、今度は、彼自らが、農民や手工業者を收奪し、欺まんし、搾取しはじめる」（一三頁）ことが豐富な原資料によりつつ解明される。しかし、商人資本の第一段階から第二段階への發展または移行の必然性の論證は充分になされていない。商人資本の外國貿易から國内市場への定着が「うちつづく社會的分業の過程と國税や地主の貨幣貢租の增大にもとづ」くものである（四四頁）としても、一八世紀のロシアにおける商人資本が「ギルド資本と商賣する農奴的農民の資本という二つのことなつた形で形成された」（七三頁）のと同様に、外國貿易にたずさわつている商人資本とは別個に、國内市場において形成されてきた商人資本の擡頭に對する前者の對應關係として第一段階から第二段階への發展を考えるべきではなかつたろうか？　第一段階から第二段階への發展を直線的な移行と考えることは、商人資本の蓄積の出發點を外國貿易にのみ歸着せしめることになり、外國貿易の過大評價となるであろう。この點、ソ同盟における本書の合評會においてベ・ゲ・ルインドジュンスキーによつても批判されたところであるが、とくに同合評會においてベ・エフ・バカノフが「商人資本發展區分の圖式をつくる必要はまつたくなく、必要なことは、交換の發展過程を全體的に區分し、それによつて全ロシア市場の確立及び國内市場の發展の時期を明確にすることである」と指摘したことは正鵠をえたものといえよう。

第三章「一八世紀ロシアにおけるギルド商人階級」においては「階級としての商人階級の形成」が「一八世紀中頃におこなわれた」ことを指摘しつつ「商業資本の代表者を、ギルド商人階級に歸することはできない。ギルド商人は必ずしも事實上の商人だとはかぎらないし、それに、商業を營んでいたのは、ギルド商人だけではなかつた」（二四頁）ことを證明するために各縣における「ギルド商人」の具體的な内容を詳細に描く。

以上の三章によつて、商人階級による市場征服の過程が論述され、「商業へのありとあらゆる參加を、商人活動と同視する」あやまりをおかしたエム・エヌ・ポクロフスキー『學派』の商業資本主義の概念を批判しつつ、著者自身の嚴密な意味での商人の概念規定が具體化されている。彼によれば、商人資本の代表者としての嚴密なる意味での商人とは、「第一に、自己生産（農民や手工業者がやるような）をせず、また商品を（ローマそのほかの征服者のように）直接のりやく奪によつて、あるいは（封建領主たちのように）貢物および租税、賦役および貢租としてうけとるのではなしに買入れ、買入れた商品をあきなうもの……、第二に、この同じ買入れた商品を（資本家や手工業者とちがつて）加工せずに販賣するために買入れるもの……、第三に、もうけをえるために商品を販賣するもの」（一三―一四頁）である。

第四章「價格と商業利潤」、第五章「商品輸送と利潤」は、本書の理論的中核をなすものである。第四章においては、商人資本は直接生産者を「勞働過程において直接に搾取することはでき」ず、「直接生産者の搾取は、市場關係、價格、不等價交換を通じてのみ商人によつて實現され」（一二四頁）ることを明らかにし、不等價交換こそが「商人資本が存在するための不可缺の條件であつた」（一二五頁）となして、「商業利潤率にとつて重要なのは、價格の高さではなくて、……價格の差である」（同上）ことを剔抉する。そのことが具體的な資料をもつて、異なつた市場における價格差、同一市場における同一商品の價格の季節的變動と商業利潤との關係をとりあげるな